

**司会者はこう感じた**

岡山県立記録資料館 定兼 学

全史料協大会・分科会では、報告者への質問のみならず、発言者間でも活発な意見交換ができることが、伝統的な特徴であろう。わたくしは、議論の流れを先導したり、軌道修正したりする能力もないので、発言希望者を指名し、時間がきたら切り上げる仕事をしたにすぎない。なるだけ多くの方々の意見交換

をと思ったが、はたしてそれがうまくいったかどうかはわからない。しかし、個性ある存在をめざす寒川文書館の高木秀彰さんの活動報告に、みんな敬嘆の思いで聞き入っていたことはよくわかった。

さて、参加者のなかには公文書館未設置の方々も多くいたと思う。わたくしは以前から、公文書館未設置の関係者へ公文書館の必要性を訴え続けているが、「自分は担当じゃないからできない」「トップダウンでないと難しい」「財政が厳しいのでできない」という声を何度も聞いたものである。しかし、担当でなくても、許される範囲で実践し、懲りずにボトムアップの提言をし、トップダウンしてもらおう方策を考え、財政面での工夫をし、実現にむけて努力している人もまた多いと思っている。そのような方々の意見を引き出せなかったことは司会者として反省している。

あらためていうまでもないことだが、今や、公文書館の必要性を認めない者は公務員および住民失格であるというところまで世論は形成されつつある（そういう世論でないなら、そういう世論を形成する任をわれわれは負っている）のだから、誰はばかることなく、公文書館の設置を主張すればよいのである。そして、未設置時代にこそ存分に理想型の公文書館を思い描くことができ、実現に向けて努力できるのである。公文書館を設置することは、私たちの短い人生のなかで、賭けてもよいプロジェクトの一つであるとわたくしは信じている。それを高木さんは実現されたのであり、未設置関係者は勇気をあたえてもらったと思う。

ところで、寒川文書館が高木さんの理想とどのくらいギャップがあったのかは別にして、現実に正規職員が高木さん1人の寒川文書館の活動について、高木さんだからできることではないか、後継者の養成はどうなっているのか、1人でそんなにするのは無理があるのじゃないか、ボランティアの参加・受入にも限界があるのではないか、それでよいの

か、など、様々な疑問が浮かんだのではないだろうか。この疑問を高木さんにぶつけるのは酷であることを参加者は承知していた。

そこでむしろ、地域公文書館のあるべき姿について、われわれは思索したと思う。大きな館では、公文書や古文書・デジタルアーカイブズを収集整理し調査研究、利用提供することを館内の事務分掌で役割分担する。その結果「これは自分の担当じゃない」などといって自分の枠に閉じこもりがちの職員が生じる。高木さんはそんなことはいってられない立場であり、幅広く住民とともに館の運営を繰り広げることになった。

「みんなが足を運びたくなる文書館」は、利用者と資料提供者との境界を廃し、利用者が資料整備に参加し、資料提供者にもなり、住民が文書館の運営にも関与することをめざすものである。それは、行政の説明責任としての公文書館を越えた存在であり、また一つの理想型を考える素材を得たとわたくしは感じた。

.....